

彩菜栽

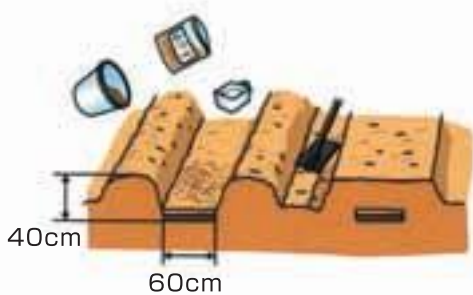
2016年
5月

大玉トマト作りのポイント



トマトには豊富な栄養分やリコピンの抗酸化作用があり、がんや動脈硬化の予防効果も期待されます。またうま味成分であるグルタミン酸を極めて多く含み、食味を豊かに魅力あるものしてくれます。生食や煮物をはじめ用途は幅広く、毎日のみそ汁の具にしても楽しめます。

種類は大玉系、中玉（ミディ）系、小玉（ミニ）系とあり、改良が進み実に多彩な品種が出回っていますが、作りこなしたいのは何といっても大



玉系です。育て方が難しいだけに、成功の喜びはまたひとしおです。作業のポイントを次の4点です。

(1) 元肥の施し方

トマトの根系は、土中で縦型に深く分布するので、これをしっかりと形成させることにより過乾、過湿に耐える健全な育ち方にする事ができ、

各花房の果実を確実に着果、肥大させ、尻腐れや裂果などの障害を防げます。2列植えの畝の中央に、幅40cm、深さ30cmぐらいの溝を掘り、粗大有機質（稲わら、刈り草、芋づるなどの中熟堆肥）、油かす、化成肥料などを最初に施します。

(2) 大苗にして定植

育苗は4号ポリ鉢で8~9葉展開まで行い、1~2花開花してから畑に植え出します。確実な着果を図るには着果ホルモン（トマトーン50倍液）の散布がお勧めです。小苗定植では後の生育バランスが極めて取りにくいです。

(3) 追肥の適期を守る

早く施し過ぎると窒素成分が効き過ぎ、茎葉の徒長を招きます。第一

花房の確実な肥大を見届けてからにしましょう。果実の横径が5~6cm以上になったところが目安です（施肥量は1株当たり油かすまたは有機配合大さじ4杯、化成肥料大さじ3杯ぐらい）。その後生育の様子を見て15~20日に1回ぐらい同量を施します。梅雨中は与えないことです。

(4) 芽かき、薬散を遅れずに

脇芽の伸びは極めて早いので、3~4cmの長さに伸びる前に必ず行うようにしましょう。毎日、少なくとも1日置きです。特に5~6段以上も長期に取り続ける場合は、適心した上に出る物も必ず取ります。

病害虫は必ず発生します。初発生は局部的ですので、早期に適応薬剤を正しい利用法で散布して防ぎます。